

台風過ぎて秋が来る

ゴールデンウィーク以来の旅となる。今回（平成12年9月15日～17日）は四国の外周をぐるり一周して来ようと思う。四国を一周するのは随分久しぶりなので、どういふ変化があるのか楽しいし、今回は鉄道だけではなく、途中でバスも入る。私の旅で観光地へ行く以外の行程にバスが入るのも、また久しぶりのことである。

またしても、ルートおよび行程が決まったのは2週間くらい前という直前になってからだ。私の場合、このところ淡々と旅に出るスタイルに変わってきた。もちろん、嬉しくてたまらないけど、以前のように前々から気持ちがみなぎらせるようなことはなくなった。社会人になってからは、何かあって突然中止になるとも限らない。もし、行く前から気持ちが高ぶっていたら中止になったときのショックが大きい。幸い今回も変更・中止の憂き目に遭うことなく、出発できるのは非常に喜ばしい限りだ。

さて、今回の行程だが、まず高松から松山を経て、大洲で泊まる。翌日に宇和島みしょうに出て御荘経由で宿毛までバスに乗り、それから高知まで列車で行き、ここで1泊。最後に室戸周りで高松へ帰るといふ予定である。大洲と高知が宿泊地になったのは、ここに私の先輩や友達がいるからだ。そこへ泊めてもらおうといふわけだ。その電話をしたのが出発の10日くらい前のことだ。どちらも二つ返事でOKしてくれた。こういうやり方でないと、厳しい予算の下では行けるものではない。低予算なら低予算なりの旅の仕方がある。

しかし、2泊のうち、高知の友達が急に帰省しなくてはならない、と電話が入った。友達はもう1人いるけど、泊められるスペースがないといふ。高知はやむを得ずホテルに投宿ということになった。

それにしても、四国をまともに回るのは、本当に久しぶりのことだ。遡ってみると、平成2年の春と平成3年の秋と2回一周旅行をしている。もっとも、旅行といっても鉄道でぐるり一周するだけで観光は何もしていない。それ以降は室戸岬へ撮影に行ったり、今は廃止された急行「よしの川」を、なくなる前に乗っておこうと目黒君と徳島線を訪れたり3、4回ピンポイントで行ったくらいで、一周となると実に8年ぶりになる。

今回お世話になる切符は「四国再発見きっぷ」なるもので、「青春18きっぷ」の売られていないシーズンの週末のみ四国島内の普通列車の自由席が使用できる切符で、1枚で5回分あり、使い方は「青春18きっぷ」と同じである。値段は5,500円と「青春18きっぷ」の半値以下だ。1日当り1,100円で乗り放題なのだから、かなりお得なきっぷだ。幸い出発前日の14日から発売となっているので、これを使わない手はない。いよいよ出発だ。

今週はよく雨が降る。台風が来るとの情報もあるけど、行けるところまで行ってみようと思う。駄目なら、引き返せばいい。進むことも戻ることもできず、立ち往生ということにはならないだろう。前日の天気予報でも60～70パーセントの予報だ。雨もまたいい。

十五夜から2日遅れの満月が、雲に霞んでおぼろげに浮かんでいる。幸い、雨はやんでいる。早暁4時40分。妻の運転で高松駅に着く。この時間なので10分くらいで駅に着いた。でも、この時間なのに車は多いように思うのは3連休だからだろうか。かくいふ私も3連休だからこうやって朝早くから出てきているのだ。

5時前の高松駅はひっそりしている。始発の「マリンライナー2号」が出た後だからかもしれない。さすがにこの時間では、まだ改札には駅員が1人しかいない。きっぷに「入鉄

済」のスタンプを捺してもらって入る。このスタンプ、駅名が入るので、どの駅で捺してもらったか分かるのはいいけど、やはり昔ながらの鉄のほうがいい。申し訳ないけど、スタンプではどうも子供の電車ごっこのようで、何だか味気ない。でも、JRでは鉄を入れてくれるような駅はもうないのかもしれない。

跨線橋を渡って、列車の発車する7番ホームに下りると、5時ちょうど発の観音寺行き
の2両編成の電車が停まっている。この車両は7000系と呼ばれる電車で、クロスシート
とロングシートが半々になっているのだけど、その「半々」に特徴があって、すなわち3
ドアの中央のドアを中心に、上から見ると前方は右側がロングシート、左側がクロスシ
ート、後方はその逆になっている。5年前の「急行三昧」でも紹介しているけど、私としては
もうひとつ馴染めない車両である。

発車10分を切っていたので、ジュースを買って席を見つけると間もなく発車する。こ
れで観音寺まで各駅に停まりながら西下する。うまい具合にクロスシートは全部誰彼か
座っていて、ロングシートにも数人は座っている。結局、私もロングシートに腰を落ち着
ける。ゆっくりクロスシートで過ごせるかと思ったけど、これも3連休の余波なのだろう。
中には、朝帰りと思われる若者もいる。

まだ、列車は闇の中を走っている。もう9月も半ば、彼岸が近くなると日が昇るのもだ
いぶ遅くなってきた。私の旅は時間を有効に使いたいということで、出発が早朝や深夜に
偏っているのだが、夜に出るか朝に出るかは、目的地へのルート上の夜行の有無で決まる。
どちらにしても、初日は尋常な出発ではないので、妻には申し訳なく思っている。それ
にしても、せっかく妻が用意してくれたパンもロングシートでは落ち着いて食べることがで
きない。

駅ごとに乗客が増えていく。本数が少ないのだから仕方がない。現在、待避線を造って
従来の2ホームから4ホーム化への工事が真っ最中の鴨川を過ぎると、うっすらと明るく
なってきた。

高架を上がって、坂出に着く。乗客の入れ替えはあったけど、乗ってくる人のほうが多
い。それも高校生が目立つ。文化祭のシーズンでその準備に追われているのだろう。私も
高校のときは朝早くから夜遅くまでやっていたものだ。このときばかりは夜に校内にい
てもフリーパスで、問題さえ起こさなければ、何をやってもよかった。まだ私のときはぎ
りぎりそういう時代であった。大学になれば、「大学の自治」という難しい言葉を持ち出す
までもなく、学内で好きなことをやっていたように思う。一晚、ドンチャン騒ぎをやろう
が、文化祭の準備をしようが、何でも無い日にみんなで夜通し語り合おうが、お構いな
しだった。そんなことを思い出していると、左手には讃岐富士の飯野山のシルエットがは
っきり見えてきた。

しょうつじ

さて、坂出を出発した列車は、聖通寺山の切り通しを過ぎると、ぱっと開けて宇多津の
街に出る。いつもならここで右方向の瀬戸大橋線に入るのだけど、今回は四国一周なので
左の予讃線を引き続き直進する。かなり久しぶりにこちら側を通る。やっとう東の空が明
らくなってきた。オレンジというよりは赤に近い。でも、分厚い雲が覆っているの
で、何やら不気味だ。

5時39分、多度津着。ここで20分停車する。かなり長い。でも、そのかわりゆっくり
できる。まず、改札を出る。多度津は私の母の実家があるから年に数回は来ていた。小
学生の頃は旧国鉄で来ていたものだが、ここ15年ほどは車になった。最近では、学
生時代に土讃線の善通寺までJRで通学していたけど、多度津は途中駅で減多に降
りることもなかったの
で、駅の様子など知る由もなかった。

6時前ではまだキヨスクは開いておらず、改札と自動券売機が眩しいくらいだ。外へ出

ると、静かで空気がひんやりしている。以前はなかった駅前の信号機が朝早いためか、まだ点滅している。しかし、このなかったはずの信号機が象徴するように、駅前の風景は変わった。左手には何か建物があつたはずだが、今は駐車場になっているし、右手にあつた蒸気機関車の静態保存は、さらに北に移動している。駅前全体が整備されたようで、広々としている。特にタクシー乗り場のロータリーを挟んだ向こうにあつたはずの車がすれ違ふのも苦勞するような細い道路は、その信号機のある立派な太い道になっている。これはこれでいいのかもしれないけど、昔の雰囲気は感じられない。

かつて駅前通りと件の細い道路の交差点の角に、いかにも常連の人だけが泊まりそうな駅前旅館があつて、見るからに情緒があつてよかつたけど、新しい道路ができたために影も形もない。多度津という町は時間がゆつたりと流れるような大らかなイメージがあつてそれがあまりに変わっているので、意外であり、少し残念でもあつた。

発車5分くらい前に戻つた。なぜ、こんなに長い停車なのかといえば、上下の特急と上りの高松行きの普通列車の待避のためである。一度に3つの列車を待つとなれば、20分停車もやむを得ない。それに小分けにするより一度で済ませたほうがいい。多度津から単線になる悲しさでもある。もうすっかり明るくなって、5時59分発。

左手に土讃線が分かれる。山沿いは黒く低い雲だが、これから走る瀬戸内はそうでもなさそうだ。雲が切れているところもある。しかし、この先の石鎚山を擁する西条辺りまで行くとどうなるか分からない。

海岸寺を出ると、右手に瀬戸内海が見えてくる。といつても、詫間に着くまでのほんの1、2分程度のことだ。雨上がりのせいもあつて、海に浮かぶ島々がきれいに見えている。

多度津を出てから急に鄙びてきた。海岸寺は突然現れるし、本山では犬の散歩をしているおじさんが休憩がてらホームのベンチに腰掛けていたりする。他の駅も概してこの調子なので、ローカル線にでも乗っているのかと思つてしまう。でも、それらの光景がそれぞれにいいものを出している。右手に虹が見えてきて6時24分、観音寺着。

ここで5分の待ち合わせで今治行きが出る。乗り換え、と思つたけど、今まで乗つてきた車両がそのまま今治行きになるので手間が省けた。ただし、そのまま乗つていたのは、私を含めて数人で、その恩恵を受けた人はあまりいない。新たに乗つた人がいたのかどうかは分からない。5分の停車なので、すぐ発車する。

豊浜を過ぎて、国道11号と併走すると、瀬戸内海が見えてきて間もなく箕浦に着く。香川県最後の駅は県境に近いという雰囲気がなく、何だかのどかである。そこへ忙しそうに、高松行きの普通列車と岡山行きの特急「しおかぜ4号」が走り去って行つた。普通列車のほうは後から「しおかぜ」に追いかけてられていて、早く観音寺まで逃げなくてはならないから、ちょっと停まると足早に出て行つた。これらの待避で7分停車。まだ旅は始まつたばかりだ。慌てることもない。

箕浦を出てすぐのトンネルで愛媛県に入る。最初の駅の川之江で数人乗つてくる。ここから新居浜にかけて、乗客はだんだん増えていくだろう。そして、大王製紙の工場への引込み線が見えてきて、伊予三島着。ここでまたまた19分の停車だ。ちょうどいい停車時間なので、改札を出て、キヨスクで今晚お世話になる先輩への手土産を買う。本来なら出発前に用意すべきところを道中で求めるのは、なんとも気が引ける。

ここでも例によって、特急の追い抜きと待避だ。これも単線なので仕方がない。これから先まだ何度となく待たし待たされるのだろう。大会か練習試合か中学生の団体を乗せて7時14分発。

ところで、初めて四国を回つたときから気になる場所がある。三島を出て少し行くと、

右手に県営か市営か企業の社宅かは分からないけど、画一化された住宅が林立しているところがある。そこには当然といえば当然なのだが、無数のアンテナが同じ方向を向いてずらりと並んでいる。あまりの数に気味が悪くなるくらいだ。落ち着いて考えてみれば、戸数の分だけ立っているわけで、別段驚くほどのことでもないのだが、私にとってはいつ通っても気になる存在である。

伊予寒川からしばらく海を見ながら進む。左手には石鎚の前座のような山が連なっている。この先は曇っていて、伊予土居を過ぎた辺りからやはり降ってきた。

関川を出ると、急に高いところを走り出して山肌を縫っている。でも、せつかく見晴らしのいいところなのに、雨足はだんだん強くなってきて、本来なら遠くに見えるはずの海もまるで見えない。

久しぶりの大きな駅である新居浜に着いた。雨はますます激しくなっている。今、列車の中にいることをありがたく思う。ここで下車して散策する予定はないけど、これでは観光どころではない。雨水がホームを叩きつけている。1分で発車。

気が付くと、車内が賑やかになっている。どこかと思えば、伊予小松だ。伊予西条も気づかず、次の玉之江でもウトウトしていた。この間約20分で、西条のような駅を寝て通過というのは、会うべき人に会えなかったようなもどかしい、釈然としない、複雑な気持ちになる。もっとも、起きていたからといって、ぜひ見ておくべきものもないし、寝ていて怒る人もいない。

にゅうがわ

丹生川、伊予三芳と中高生が降りていって、車内に再び静けさが戻った。右手に小松から分岐して、本四連絡橋の最後の1本である尾道・今治ルート「しまなみ海道」へ通ずる高速道路の建設が進んでいる。もう開通して1年半になるのに、まだ完成していない。本来なら、橋の開通と同時にできていなくてはならないのに、この有り様だ。

瀬戸大橋にしても、明石海峡大橋にしても、受け皿の四国の高速道路は後手後手だった。だから、瀬戸大橋が開業した年こそ観光客が伸びた四国は今はさっぱりだし、今、淡路島で開催されていて、間もなく終了する「淡路花博」も関西からのアクセスもちろん、四国は徳島の高速道路がぎりぎり間に合って愛媛、高知と直結したから行きやすくなったけど、香川県からがよくない。その香川県もやっと来春高速が徳島まで伸びる。諸々の事情はあるのだろうけど、香川県は他県と比べてなぜこうも出遅れるのかと、地元ながら情けなくなってくる。

伊予桜井はいまだ旧態依然の佇まいを残している。JR四国は確か10年程前にほぼ全ての駅について改装をやっていたように記憶している。やらなかったのは、各市にあるような大きい駅や建て替えを予定している駅くらいのもので、途中の小駅などは軒並み改装されたと私など思っていたし、四国ではもう情緒ある駅は見られないと思っていた。でもこうやって、旧国鉄がまだ生きているのは、なんだか故郷に帰ってきたようで嬉しくなる右手奥には「しまなみ海道」が見えてきた。曇ってはいるけど、はっきり見えている。

続く伊予富田では、これまた嬉しいことに、旧国鉄時代の駅名標がホームの待合室に掲げてあった。青字に白でかかれた丸みを帯びた国鉄独特の文字は、これもまた四国ではほとんど見られない。ときどき電柱に駅名を書いたものが残されているけど、駅名標となれば、もうそこら中で見かけるJR以後のものしかなく、これもまたお目にかかることなどできないと思っていたものだ。もっとも、本州もたとえば中国地方のローカル線に行けばまだ残っているところもあるけど、それより地元の四国に残っているというのがいい。

8時40分、今治着。雨は小降りだけど、相変わらず雲は厚い。この今治駅は高架駅である。高架になってもう7～8年になるだろうか。たしか私が学生の頃に高架になったと思う。時間は経っても、スマートできれいで落ち着きがある。

いったん改札を出て、「鯛めし弁当」を買う。今日はこれで2食目だ。旅に出ると、食欲が旺盛になって、1日に5回食べたりすることもある。だから、私は旅から帰ると、たいい体重が増えている。

ところで、次は9時12分発の松山行きで同じホームから出るのだが、実はこの列車も今まで乗ってきた今治行きの車両がそのまま松山まで行くのだ。結局のところ、朝5時ちょうどに高松を出た観音寺行きはその先の松山まで途中観音寺行き、今治行きとなりながら、同じ車両で松山まで行くのである。ならば、1本の列車でもいいではないかと思うし、そのほうが乗客側にも案内するJR側にもいいと思うのだが、何か訳があるのだろう。私のような客にとっては乗換えをせずに済むので、ありがたい列車である。

今治を出ると、右手に再び大きく「しまなみ海道」が見えてきた。雨は上がっているみたいだけど、晴れていればなあ、と思う。左手には城のようなものが見える。これは地元の名士が建てた今治城に似せた家で、よほどの大金持ちなのだろう。これを見て、本物の今治城を見るのを忘れていたのを思い出した。

波方を出て、ちらっと海が見える。だんだん雲が切れてきて、白い雲になってきたので、これなら松山以降の観光も期待できる。いくら好きでやっている鈍行ばかりの旅でも、ちゃんと見るところは見て帰る。

大西で6分停車。何もやることなく、駅の風景を眺めていると、セミの鳴き声が聞こえてくる。もう9月も半ばというのに、まだセミが鳴いているのだ。そういえば、三島では改札を出る際に跨線橋を渡るとき、息絶えたアブラゼミが足元に横たわっていた。まだ暑いから、セミも夏と勘違いしているのかもしれない。

伊予亀岡では12分の停車。長いと思ったら、上下の特急「しおかぜ」の待避だ。今治ー松山間は、特急が1時間に1本、普通列車も1時間に1～2本走っていて、それが上下になるから、行き違い可能駅ではほぼ各駅で追い抜き、行き違いの待避がある。本数が多いのはいいけど、停車時間を減らすなどダイヤ面をもう少し工夫したほうがいい。しかし、ここまで来れば、複線化したほうが早いような気もするが、まず実現しないだろう。

先ほど買ってきた「鯛めし弁当」はできたてらしく、あたたかい。ご飯に鯛のほぐし身を交ぜて、ほんのり醤油を入れた炊き込み御飯だ。薄味なので、あまり受け付けない朝の胃袋でも食べやすい。

亀岡、菊間辺りではトンネルがいくつか続いて、間近に海が見える。ちょっと高いところを走っているのだから、だいぶ遠くまで見渡せる。併走する国道196号は海にくっついて走っている。地元の人にとっては見慣れた景色でも、私にとっては記憶も曖昧なので新鮮だ。

伊予北条に着く。途中にあった小駅と同じような造りで、とても市の中心駅には見えない。市の繁華は違うところにあるようだけど、これでは駅がかわいそうだ。これは北条に限らず、全国各地で見られる光景だけど、鉄道好きからすれば寂しいものがある。駅の手前で香川県で最大手のスーパーマーケットが建設されているのが見えた。外観はほぼできていて、開店に向けて準備が進められていた。どうも、その辺が賑わっているらしい。

北条を過ぎると、近年になってできた新しい駅が続く。その一つの光洋台を出ると、松山まででは最後の海となる。この辺もトンネルが多く、高松からもう10個は超えただろう。堀江湾を右手に見ながら、奥まった辺りが堀江港かなと思う。広島の実線の仁方とここ堀江を結ぶ国鉄の連絡船である仁堀航路が廃止されて、もう20年近くになる。そもそも1日に3往復しかなかった航路だから、廃止されても仕方なかったかもしれないけど、実際に駅に着いてみると、とても船と連絡する駅には見えなかった。規模からすれば先ほ

どの北条とあまり変わらない。ぽつんと建っている。でも、このローカル色がいい。

もう終点が近づいてきた。松山の一つ手前の駅である三津浜は小ぢんまりした駅だけど、本州や九州方面への船が発着する松山観光港の最寄り駅だから、駅前にはタクシーがたくさん停まっている。でも、適当な船がないのかもと三津浜に用事のある人はいないのか降りていく人は少なかった。

三津浜を出て5分、伊予鉄道を跨いで10時36分に松山着。2両編成で松山まで来るとかなり立ち客が増えていた。

松山駅も随分久しぶりに降りる。もう4～5年ぶりくらいではないか。その駅舎が改修されている。やはり手狭になっているのだろう。老朽化が進み、利用客も多いからかもしれない。でも、県庁所在地の駅として3ホームというのはいかにも規模が小さい。

さて、改札を出る。松山で観光をするつもりで予定を立てているので、数時間は取ってある。幸い雨も止んでいることだし、まずは松山城でも行こうかと思う。

そのためには切符を買わなければならない。こういうときは路面電車が一番手っ取り早い。バスは本数が限られているけど、路面電車なら10分間隔くらいで運転されているはずだ。多分乗り放題の切符が売られていると思うけど、どこにあるのか分からない。路面電車のホームに行くと、松山駅の中の観光案内所にあるということが書いてあったので、再び駅に戻る。

一日乗車券は460円である。1回当たりの運賃は均一料金の170円だから、3回乗れば元が取れる。観光客には非常に便利な切符だ。こういう切符は時刻表にも載っているけど、その土地へ行かないと分からない場合もあるから、見つけたときの喜びは大きい。

その路面電車で松山城へ向かう。駅前からまっすぐ走ってお堀端へ出て、それから右に曲がって、お堀に沿って走る。松山市駅は通らず、そのまままっすぐ走って、大街道という松山で一番の繁華街で降りる。私は大街道に背を向けて、ここから歩いて5分くらいのところにある松山城へのロープウェイ乗り場へ行く。しかし、祝日にはもうひとつ人通りが少ない。この天候では仕方がないかもしれない。多分、私の降りた反対側の大街道は大勢の人で賑わっているのだろう。

寂しい商店街を抜けると、松山城のロープウェイの乗り場に着く。ここなら観光客がそこそこいるかと思ったけど、ここにもあまりいない。

乗り口である東雲口にはリフトとロープウェイがあって、7、8分待つことになるけどロープウェイにした。その横をリフトで登る人がいて、なるほど7、8分待つよりはリフトのほうが早く降り口の長者ヶ平に着きそうだと感じた。後のことになるけど、ロープウェイの車内で聞いた案内放送では、ロープウェイが所要2分、リフトが所要6分と言っていた。10分間隔で運転するロープウェイと休みなく動いていつでも乗れるリフトでは、発車間隙でない限り、リフトのほうが早い。でも、私はカメラの入った鞆を持っているので、安心できるロープウェイにした。



トのほうが早く降り口の長者ヶ平に着きそうだと感じた。後のことになるけど、ロープウェイの車内で聞いた案内放送では、ロープウェイが所要2分、リフトが所要6分と言っていた。10分間隔で運転するロープウェイと休みなく動いていつでも乗れるリフトでは、発車間隙でない限り、リフトのほうが早い。でも、私はカメラの入った鞆を持っているので、安心できるロープウェイにした。

リフトに乗った人を何人も抜いて、上の長者ヶ平に着いた。降りると、いきな

りお土産売り場があり、店のおばちゃんが降りてきた人たちに一服していけ、と声をかけている。松山観光は松山城だけではないので、まっすぐ天守閣を目差した。また少しばらついてきた。

途中、昔使っていたらしい小さくかわいらしい2両のロープウェイ車両を見ながら、緩やかな坂を登っていくと、急に広いところに出る。本丸である。そこには茶店があって、脇には藤棚か何か分からないけど、その下にベンチがあり、年配の人がくつろいでいる。本丸の向こうの正面には天守が見える。でも、ここも改装中で、一部にシートが被せられている。もっとも、撮影には支障はなかったので、いろいろと撮影した。

松山城は加藤嘉明が築城した、連立式平山城と呼ばれる城だ。三層の天守閣はなかなか壮大で、文化財にも指定されているようだ。

同じ四国でこういう立派な天守を見ると、つい我が高松と比較してしまうのだが、伊予・松山十五万石は讃岐・高松十二万石より大きい。江戸時代の頃から規模は松山のほうが大きいということなのだろう。高松は宇高連絡線のイメージもあり、長い間、「四国の玄関」と言われていて、四国の中心のような印象が強く、実際に中央官庁の四国の出先機関は高松に置かれることが多かった。でも、それは旅客の流れや関西圏により近いなどといった理由からそうになっていただけであって、ここ10年か15年でその機能の一部が松山へ移ったりしている。今や四国の中心は松山である。高松はそういう機能が減り、関西圏へのスポイト現象で、ますます寂れているような気がする。

中に入って、一番上まで登る。四方が一望に見渡せる。遮るものも見当たらない。これなら敵が攻めてきても、事前に察知できる。感心していると、雨がだんだん強くなってきた。すると、私の携帯電話が鳴る。

「おい、こっちはバケツをひっくり返したような大雨やぞ。来るんはええけど、大丈夫か？」

今晚お世話になる先輩からの電話だった。

「今、松山におるんですけど、こっちはましですね。まあ、行けるところまで行きます」

「あんまり無理するなよ」

「またそっちに近づいたら連絡します」

大洲は大雨らしい。とって、久しぶりの旅をみすみす取り止めるわけにはいかない。でも、今回は台風絡みなので、明日泊まる高知の潮見君からも天気予報を見ながら来いよ、と言われている。判断の分かれるところだ。

天守を後にして、足早にロープウェイの乗り場へ急ぐ。濡れたくないのもあるけど、早く次の目的地である道後温泉へ行って、温泉に浸かりたいというのもある。

ロープウェイで下まで降りて、待合室にあるテレビを見ると、高知の佐川町で、1時間に20数ミリの雨が降っているという。これは今だけのことだとは思うけど、先へ進んでいいものか、留まるべきか、引き返すべきかますます迷ってしまう。それより、まず当面困るのは、傘を持っていないことである。このままでは道後へはちょっと行けそうにないしばらく待ってみたけど、雨は止みそうにない。それにしても、台風が来る中の旅だというのに傘を持ってないとは、我ながら呆れる。

呆然と雨模様を眺めていると、うまい具合にロープウェイ乗り場の向かいにコンビニエンスストアがあった。渡りに船とばかりに、道を横切って店に飛び込む。ジャンプ式の傘もあったけど、安い普通の手で広げるものにした。店員のアルバイトの男の子もさすがに事情が分かっている、包装していた袋から出してくれた。

さて、傘は買ったものの、道後へはどう行けばいいのか分からない。さっき来た大街道かみいちまんさらに離れて太い道に出る。「道後」という道路標識に沿って歩くこと十数分、上一万の

停留所に着く。ジーパンの裾が水を跳ね上げて濡れている。しばらくすると、道後温泉行きの路面電車がやって来て、ほどなく終点の道後温泉に着いた。

路面電車で道後へ来るのは初めてだ。今までは車で直接道後温泉を目指していたから、路面電車の駅がどんなところなのかも知らなかったけど、横断歩道を挟んだ駅前はちょうどアーケード街の入り口で、一昨年の冬に来たときに道後温泉の本館から途中まで歩いたことを思い出す。でも、最後まで歩き通さなかったから、駅前に出ることまでは知らずじまいで今日に至っている。今日みたいな雨降りにはありがたい存在だ。

いろいろと店を眺めながら歩くと、5分くらいで道後温泉本館に着く。温泉だから雨など関係なく、多くの人を訪れている。本館前で記念撮影をしている女性のグループがいれば、入館料を払う窓口には5、6人が並んでいて、なかなかの盛況である。

普段家で入る風呂は鳥の行水程度なのだが、温泉は好きなのだろう。松山へ来るとたいい道後を訪れている。これは学生時代から続いている。学生の頃など夕方にその日のサークル活動が終わると不意に、

「おい、今から道後行くか？」

という誰かの一声で、香川の善通寺から一路道後を目指して走ったこともある。それでも、何の違和感もなくみんなが喜んで行ったものだ。それ以来、私の中では道後は松山へ行くと行かなくてはならないような場所になっている。

今回もいつものように、大衆風呂に入る。大衆風呂といっても浴槽は大きく、天井も高いので、ゆったりとしている。我が家の風呂がさいころのような窮屈な風呂だから、たまに広い風呂に入ると、開放感とともに贅沢な気持ちになる。

でも、やはり風呂だ。30分も1時間も浸かってはいられない。それでも、雰囲気を満喫したいから、しばらく更衣室の扇風機の前で涼んだり、下足場で牛乳を飲んだりして、30分くらい過ごす。外へ出てみると、雨は小降りになっている。

先ほど通ったアーケードで駅まで戻って、駅前いさわにの観光案内所に入る。そこで道後周辺のパンフレットをもらう。その中で伊佐和邇神社というのがあって、ご利益とか、ぜひ願掛けをしなくてはならないということは特にないのだけど、出発する前から行きたいなどは思っていた。地図を見ると、このすぐ近くだ。雨もほとんど止んだことだし、このまま松山駅に戻るのももったいないので、行ってみることにした。

案内所を出ると、緩やかな登り坂の先に見えている。たしかにこれは近い。行ってみると、大きな石に「伊佐和邇神社」と彫ってある。立派だなと見上げると、その延長線上に赤いお社が見える。正面にある石段を見ると、げっそりしてしまった。我が地元にある金比羅宮の本宮へ通ずる最後の石段くらいの段数はありそうだから、100段以上はあるだろう。それも昔の階段だから、急になっている。

でも、せっかく来たのだから上まで登る。ただ、上に着いた頃には汗が吹き出っていて、温泉に浸かった意味がまるでなくなってしまった。そうして上がってみると、もう目の前にお社があって、石段とはそう離れていない。左手には社務所があり、お守りなどが売られているけど、人気はなくひっそりとしている。鳥居とお社と社務所、これだけだ。だから、すぐに降りた。

もうすっかり雨も上がって、傘を振り振り駅に戻る。



来た道に戻るのでは面白くないので、松山駅までのルートを行きと変えてみることにする。さっき乗った上一万で降りて、環状線に乗り換える。途中、本町六丁目で乗り換えて本町線に乗ろうと思ったけど、腰が重たく、結局松山駅を通り越して、伊予鉄道、通称「伊予鉄」市内線の中心駅である松山市駅まで行った。それから引き返して松山駅に戻る。大学受験のときに始めて乗って以来、伊予鉄の路面電車は本町線だけが乗り残しとなっている乗り換えなかったばかりに、今回も路面電車の全線に乗ることができなかった。

4時間ぶりに松山に戻ると、もう発車20分前になっている。次に乗るのは、伊予市行きで、たったの1両だ。そして、今回初めてのワンマン列車でもある。ホームは到着を待つおばちゃんや中高生で一杯だ。本数もそう多くはないから仕方のないことだ。伊予市から先は電化されていないのでディーゼルカーとなる。だから、そこからはクロスシートだろうと勝手に見越して、駅弁を買う。そういえば、松山で駅弁を求めるのは恐らく初めてだ。買ったのは、「醤油めし」だ。朝、今治で買ったのと同じようなものだが、これはこれでまた違った味を出しているだろう。

車内はもう大勢の人で、立っている人もいる。伊予市からはすぐ宇和島方面へ接続しているのだから、その分多いのだろう。14時33分発。

電車は滑るように快調に走る。何ととっても加速がいい。四国は長らくディーゼルカーしか走っていなかったから、この走りっぷりは気持ちがいい。

石手川を渡ると、市坪に着く。駅前には巨大な建物が建っている。松山中央公園内にある「坊ちゃんスタジアム」だ。この7月にオープンしたばかりの新しい野球場で、さっそくプロ野球の公式戦も行なわれた。でも、まだ駐車場や周辺の道路が整備されていないらしく、ホームしかない無人駅でもJRのほうが便利なようだ。

重信川を過ぎて15分も走ると、終点の伊予市に着く。駅の周りには有名な鯉節のメーカーの工場が並んでいる。ここでは2分の好接続で八幡浜行きが出るので、ゆっくりはしてられない。14時51分発車。

ところで、乗り換えた列車は2両編成のディーゼルカーなのだが、その車両がなんとかつての特急用車両だった。185系といって、旧国鉄の最末期に従来の特急用からの置き換えと増発のために造られた車両なのだが、登場以来わずか十数年で普通列車用に格下げされてしまった。JRになって間もなく、JR四国が独自の新車を次々と投入したために働き場が少なくなって、10年も経たないうちに一部がJR九州に売却されている。今でも現役の特急として走っているのは、「剣山」と「むろと」の2系列に過ぎない。



そんな悲運の車両でもデッキはあるし、カーテンも外されておらず、内装は変わっていない。ただ、シートのリクライニングはロックされているので、倒すことはできないけど、台車までは変わっていないだろうから乗り心地は特急クラスだ。それに窓が広いから窓外を眺めるのにも適している。多分、四国では一番贅沢な普通列車かもしれない。

日が射してきた。さっきまでの雨が嘘のように眩しい。雨上がりの風景は全体をメリハリのあるものにする。高架を

走っていて、眼下の田んぼを見ていると、日光に反射して、キラキラ輝いている。アスファルトも光っていて引き締まったように見える。空気中の見えない埃を洗い流していくすみが無い。

向原を出ると、どんどん高いところへ登って、ちらちらと海が見下ろせる。次の高野川を出てしばらくすると、急にぱっと開けて海に出る。太陽が映ってまともにこちらに反射する。眩しいから、進行方向右側のカーテンはほとんど閉まっているけど、唯一私のところだけは開いている。こんな景色をなぜ楽しまないのかと思う。

松山で買った「醤油めし」を開く。五目御飯の上にぜんまい、たけのこなどの山菜がたくさん乗っていて、あっさりした味になっている。多分、もち米を使っているのだろうモチモチした食感がある。もう午後3時、おやつ時間に昼食を摂っている。でも、昼食とはいっても、これで今日は3食目だ。

伊予長浜の手前で先輩から電話がかかる。

「今どこに居るんぞ？」

「そっち向かう列車で、もう長浜が近いです」

「天気はどうなんや？」

「もうこっちは晴れで、回復してますね」

「なら、何時くらいに会う？」

「最初の予定通り6時に大洲の駅前ですか？」

「おう、構わんぞ。迎えに行くわ」

「よろしくお願いします」

これで、大洲までは行けることが決まった。その先はやはり、行ってみてから決めることにする。引き返すルートを変えるか足止めを喰らうか、自分の旅ながら興味は尽きない。何とんでも普通列車専用ながら乗り放題切符を持っているから強い。でも、JRがストップすると、何の意味も持たなくなるので、それだけは平にご容赦願いたい。その一方で、四国をあちこち回っている割に腰を落ち着けて観光をしたということがあまりないから、言ってみれば、ほとんどが初めて訪れる場所のようなものである。足止めになったらそれで、そこで観光をすればいい。とにかく最終日に帰れるのなら、多少のハプニングは一向に構わない。

伊予長浜に着く。ここで4分の停車。改札の女の子がきれいでスタイルもいいので、発車するまで見とれてしまった。そういえば、朝から列車に乗っているけど、職員の年齢層が若くなっている。車掌は男性、改札は女性が配属されているようだ。たしかに男性からすれば、改札や窓口はきれいな女性が接してくれるほうが気分はよくなる。名残惜しいけど、改札の女の子と別れて、列車は先へ進む。

長浜を出ると、左にカーブして肱川に寄り沿う。川幅が広く、その幅一杯に茶色い水が轟々と流れている。これから一番ひどいらしいところに行くので、上流のほうへ行くともっとすごいことになっているのかもしれない。これは正に濁流と呼ぶにふさわしい何人たりとも止めることのできない自然の迫力を感じる。

「バケツをひっくり返した」ような雨の一端を肱川に見ながら、伊予白滝に着く。ここで8分の停車。3年前、結婚する前に妻と近くの白滝公園を訪れたことがある。滝の好きな妻は、山水画のようなもの、多くの水を湛えてどおっと落ちてくるもの、糸みたいに細いのがたくさん連なっているものなど、大小いくつもの滝を一度に見られたので、大いに堪能していたのを覚えている。そんなことを思い出しているうちに急に風が出てきて、雨も落ちてきた。でも、これはすぐに止んで、ほっとする。

16時09分、今晚の宿泊地伊予大洲に着く。大洲で降りるのは初めてだ。いつも列車の窓越しに改札から見えるほんの少しだけの駅前風景しか見ていないから、これは見ていないも同然だ。さすがに結構乗降がある。市役所などが少し南に位置しているためか、市の中心駅でありながら、それを感じさせない寂しい駅前風景だ。バスのロータリー、ちょっとした雑貨店、飲み屋など一応それなりの体裁は整っているけど、こんなものか、と思ってしまう。

そこへ一台のマイクロバスがやってきた。これから大洲の街を散策する予定である。でも、行先標を見ても、どこやら分からないので、運転手に聞いてみる。目的のバス停に停まるとのことで乗り込む。乗るとすぐに発車した。

バス停にして、5、6つくらいで、目的の大洲本町に着く。この運転手、私が不案内なのを察してか、大洲本町までの運賃や次で降りてくださいなど、丁寧に教えてくれた。多分、路線バスだろうと思うけど、観光地を走るバスは概して案内も丁寧で愛想もいい。ついでに帰りのバスの時刻も調べる。17時50何分か、正味1時間半の観光となる。

地図を持っているので、道に迷うことはない。しかし、距離感などはつかめないで、時間配分が難しい。とりあえずは肱川の流れる赤煉瓦館のほうへ行く。途中、「おはなはん通り」というのがある。30年くらい前にドラマの舞台になった場所で、当時の佇まいを残しているようだ。また、「伊予の小京都」と呼ばれるだけの街でもあり、どこか上品な雰囲気漂っている。その街並みを割と縦横に歩いたのに、どの筋が「おはなはん通り」なのか結局最後まで分からなかった。

昔ながらの街並みをのんびり歩く。時折り、子供たちが自転車で走り抜けて行く。観光客らしい人はあまり見かけない。観光地でありながら、普段のままの光景というのは非常にありがたい。

10分くらいで赤煉瓦館に着く。元は大洲商業銀行で、今はちょっとした休憩施設になっている。2階では民芸品や地元の人が作った陶器や手芸品などが売られている。カウンターには女性が2人いたけど、こちらに干渉することはなかった。2階には喫茶もあり、コーヒーの1杯でも飲みたいところだけど、今回は時間があまりないので、遠慮することにする。

棟続きになっている隣の建物では、1階がこの煉瓦館の歴史や全国の煉瓦館を紹介するコーナーになっている。これはまるでお城の天守閣に登れば必ずある全国の天守閣の写真や解説と同じだ。2階では、名前は忘れたけど、書や写真、華などの展示会を催していた。こちらのほうはじっと見入っていると、主催者が寄ってきて、「いいでしょう」などと言われそうな雰囲気だったから、一通り見ると、すぐに出た。

赤煉瓦館から、また碁盤の目をクネクネと行きながら、

「臥竜山荘」へと向かう。ここは手前に肱川が流れ、奥

には富士山を望む大洲の景勝地である。さぞ趣きのある落ち着いた風景なのだろうと思っ
て肱川まで出て見ると、ものすごい濁流で、先ほどと同様に川幅一杯に泥水が流れている。本来はこんなことはないのだろうけど、この分では臥竜山荘に行ってみても、風光明媚というわけには行かないだろう。だから、入り口の門構えだけ見て退散する。





大洲観光も楽ではない。ちょっとずつの摘み食いのようになっている。それもこれも限られた時間内で回ろうとするからで、別に大洲の街が悪いわけではない。臥竜山荘だって、もう30分くらい余裕があれば、肱川の流れに関係なく見ていたと思う。

ところで、これまで見てきた赤煉瓦や臥竜山荘は国道56号の東側にある。次に見ようと思っているのは大洲城で、これは国道の西側にある。国道を挟んでちょうど同じくらいの距離があるので、反転して倍の道のりを歩かねばならない。

だいぶ、足取りが重くなってきた。もう17時になる。早く行かないと薄暗くなって、城跡を歩くには心許なくなる。国道はかなりの交通量だ。この辺で幹線道路といえば、この56号くらいしかなく、混むのもやむを得ない。その56号を横切り、さらに西に向かう。すると、今までの下町の雰囲気ではなく、昔ながらの商店が建ち並ぶ、多分大洲でも繁華街らしいところになる。その街並みを抜けると大洲の市民会館に出る。そこが大洲城の入り口で、大手門はないけど、入るなり坂になっている。お武家様は毎日この坂を登って出勤していたのかと思うと、大変なことだと思う。でも、これだけでも十分な鍛錬になったに違いない。

だんだらの坂とはいえ、長いのでかなりきついなと感じていると、ようやく天守のあったところまで出る。そこには櫓だけが残っていた。でも、傍らにある案内板には、天守閣も平成16年には復元されて、江戸時代当時のまま、櫓と棟続きになると書かれてあった。そのときはぜひ訪れたいものだ。

誰もいなくて、辺りはひっそりとしている。北側には肘川を渡る予讃線の鉄橋が見える。南側には大洲の街並みと肱川の流れが見られ、河岸には鵜飼の見物用の屋形船が何艘も横付けされている。ここからは大洲の全体が見渡せる。何事も全体を把握するには上から見たほうがいい。

10分くらいそこにいて、下に下りてみる。同じ道に戻るのも面白くないので、途中から反対側へ回る。菖蒲公園という名前だったと思うけど、忘れてしまった。人工の池に菖蒲が植わっていて、遊歩道になっている。所々に屋根の付いた休憩所もあって、散歩の途中で休んでいるような人もいる。今は菖蒲は咲いていないけど、その季節になればきれい花が池一面に咲き誇るのだろう。

公園を抜け、民家の裏を通過して、肱川の土手に出る。間近で見ると迫力がある。とても水辺まで下りてみようとは思わない。でも、わざわざ土手に来たのには訳があって、先ほど天守のあった丘から鉄橋を見ていると、そこを特急列車が走って行った。これは絵になると思って、何の障害もない土手まで来たのだ。時刻表を見ると、17時28分に大洲を出る宇和島行きの普通列車がある。あと数分もすれば鉄橋を渡ると思うから、それを狙う。

すると、ほどなく列車特有のカタンカタンという音が聞こえてきて、列車の姿が見えて





きた。音の主はキハ58系の2両編成で、かつての急行編成だ。車両自体の数が減ってきて近頃は見ることも減ってきたので、ここぞとばかりにシャッターを押した。でも、帰ってから現像してみると、川の写真を撮っていたら、たまたまそこを列車が通りかかったというような出来栄であった。被写体が少し遠かったようだ。

そんなことなどつゆ知らず満足して、国道に戻る。かなり歩いたから、かなり戻らなければならない。菖蒲公園の横を

通って、子供たちが遊んでいるのを見ながらのんびり歩く。矢継ぎ早ながら、見る予定のものは見たから、帰りはゆっくり街の雰囲気を楽しむながら歩く。

15分くらいでバス停に戻る。大洲本町という名前だけのことはある。古めかしいながら、切符売り場がある。そこで切符を求めて、バスが来るのを待つ。車の量の多い国道を眺めて、ぼおーとしながら待っていたら、目の前を先輩の乗った車が通った。先輩のほうも気づいて、すぐに停まってくれた。久しぶりに会う先輩だから、バスの運賃は惜しくない。少しでも長く会えるほうがいいに決まっている。

先輩は私がかつて勤めていた会社の先輩で、年は1つ上で何事も頼りがいのある人で、いろいろアドバイスなど頂いた。今はこちらに移って、別の仕事に就いている。

聞くと、まだ途中で今はちょうど休憩時間だという。休憩については融通が利くということ、こうやって私を迎えに来てくれている。

「雨が上がってよかったの」

「無理かと思いましたよ」

「でも、明日も分からんぞ」

「どうするかはそのとき決めます。ところで、仕事は大変ですか？」

「夜は遅いからの。でも、昼くらいの出勤やけん、まあ、大丈夫や。それに3日に1回休みがあるし」

「そういうんもええですね」

「平日に役所とか行けるしの」

そう話しながら、車はだんだん田舎のほうへ向かっている。高松でも、これでも市なのかというところはいくらでもあるけど、それと同じような周りが田んぼだらけのところに出た。私は先輩の家はてっきり駅の近くだとばかり思っていた。

「あそこに見えるんが俺の住んどるマンションや」

背が高いし、他にはあまり建物も建っていないので、すぐに分かる。新しいらしく、きれいなマンションだ。2階なので、備え付けのエレベーターに乗るより、階段のほうが早い。

招じ入れられると、今時のマンションの標準である中央廊下を挟んで、左右にバス・トイレ、部屋があって、奥に台所と居間という間取りだ。時々、友達の家に行くと、こういうマンションが多くなっていて、間取りもよく似ているのだが、共通しているのは、台所と居間が続きになって仕切りがない分、広くゆったりしている点だ。私が住んでいるのは、昔のいわゆる「文化住宅」で、玄関先に立てば、どの部屋でもすぐにいける間取りになっていて、仕切っているのは襖やガラス戸ばかりで壁がほとんどない。

奥さんと子供2人が出迎えてくれる。奥さんもやはり以前勤めていた会社の人で、先輩が結婚してからは2、3度会ったくらいだ。子供は2人とも男の子で、元気がありそうだが、今は猫をかぶっている。

さて、途中で買って来たものなので恐縮するのだが、早速買って来たお土産を渡す。さぬきうどんなので喜ばれる。まずは一献ということで、ビールを出してくれる。ただし、先輩は仕事の休憩時間に抜けているので、今は飲まない。私も勝手に押しかけて来たのだから、無理は言わない。奥さんの手料理も運ばれてきた。

しばらくすると、先輩は仕事に戻るということで、テレビを見ながら奥さんと話をする。奥さんは子供たちの世話をしながら私の相手をするので、さぞ気を遣ったと思う。子供たちはだんだん慣れてきて、私の周りから離れようとしなない。絵本を持ってきて、説明してくれたり、あやすと大笑いしたり、膝の上に乗ってきいたりして、初めてなのに、よく馴染んでくれた。子供と遊んだことのある大人というのは、子供のほうで分かるらしい。何か雰囲気が違うのだろう。

知らないうちに始まった感のあるシドニーオリンピックの開会式を見ながら、近況や子育てのことを夜が更けるまで話した。先輩はいつも0時前後にならないと帰れないようだいくらもう慣れたとは言っても、先輩も奥さんも大変だと思う。そうしていると、先輩が帰ってきた。やはり、帰ってくるまでは寝るわけにはいかない。

先輩とも互いに近況報告をして、30分くらいで寝た。私の明日の朝が大変早いのだ。今日よりましだが、始発に乗るから6時には起きなくてはならない。先輩は昼頃からの出勤なので、6時といえば、本来なら寝ている時間帯だろう。なんだか迷惑ばかりかけて、お暇するようで恐縮する。うどんではとても礼は尽くせないくらい歓待してくれた。これから、また躰をかいて迷惑をかける。

「台風過ぎて秋が来る」の続きを読む